

左ぎっちょの正ちゃん

小川未明

青空文庫

まさ 正ちゃんは、^{ひだり}左ぎつちよで、はしを^も持つにも^{ひだりて}左手です。まりを^な投げるのにも、^{みぎて}右手でなくて^{ひだりて}左手です。

^{まさ}「正ちゃんは、^{ひだり}左ピッチャーだね。」と、みんなにいわれました。

けれど、^{がっこう}学校のお習字は、^{しゅうじ}どうしても^{みぎて}右手でなくては^{いけません}いけませんので、^{お習字}お習字のときは^{みようて}妙な手つきをして、^{ふで}筆を^も持ちました。最初、^{えんぴつ}鉛筆も^{ひだりて}左手でしたが、^じ字の^{かたち}形が^{へん}変になつてしまうので、これも^{みぎて}右手に^も持つ癖をつけたのです。

^{かあ}お母さんは、^{こま}困つてしまいました。

「はやく、^{みぎて}右手で^も持つ癖をつ^{くせ}けなければ。」と、^{はん}ご飯のときに、とりわけやかましくいわれました。すると、^{とう}お父さんが、

「^{ひだり}左ききを^{むり}無理に^{みぎ}右ききに^{なお}直す^{めくら}と、^{あたま}頭が悪^{わる}くなるとか、^{しんぶん}新聞に^か書いてあつたよ。だから、しぜんのままにしておいたほうがいいのじゃないか。」と、おつしやいました。

こう、^{はなし}話が二つにわかれると、^{まさ}正ちゃんは、^{えんぴつ}いったいどうしたらしいのでしようか。それで、つまり、^{がっこう}学校で^じ字を^か書くときには、^{えんぴつ}鉛筆や、^{ふで}筆を^{みぎて}右手に^も持ち、また^{べんどう}お弁当を

たべたり、お家^{うち}でみんなといつしよに、お膳^{ぜん}に向^むかってご飯^{はん}をたべるときは、はしを左^{ひだり}手で持^もつてもやかましくいわぬということになったのです。そして、もとより、原^{はら}っぱで、まりを投げるときは、左^{ひだり}ピッチャーで、威張^{いば}つてよかったのです。

なんにしても、正^{まさ}ちゃんは、指^{ゆび}さきですることは、不器用^{ぶきよう}でありました。鉛筆^{えんぴつ}もひとりであまく削^{けず}れません。女^{じょ}中^{ちゆう}のきよに削^{けず}ってもらいます。きよは、お勝手^{かつて}のほうちようで削^{けず}つてくれます。

「じょうずに、けずつておくれよ。」と、正^{まさ}ちゃんは、自分^{じぶん}がけずれないくせに、こういいます。

「はい。」と、きよは、やりかけている仕事^{しごと}をやめて、ぬれた手^てで、丁寧^{ていねい}に、けずつてくれました。しかし、そんなときには「ありがとう。」というのを、正^{まさ}ちゃんはけつして忘れ^{わす}ませんでした。

もう一つ、手^ての不器用^{ぶきよう}なことの、例^{れい}をあげてみましょうか。それは、鼻^{はな}をかむときでした。

「正^{まさ}ちゃん、ひとりで、鼻^{はな}をかんでごらんなさい。」と、お母^{かあ}さんが、おっしゃいますと、正^{まさ}ちゃんは、紙^{かみ}を持^もつてきてかみますが、かえつて鼻水^{はなみず}をほおになすりつけるのです。

こんなとき、もしお姉さんが見ていらつしやると、すぐに立つてきて、きれいにかみ直した。き

ある日のこと、正ちゃんは、大将となつて、近所の小さなヨシ子さんや、三郎さんたちといつしよに原っぱへじゆず玉を取りにゆきました。そして、たくさんとつて、材木の積み重ねである、日のよく当たるところで遊んだのです。

「白いのもあるし、紫色のものもあるね。」

「これは、緑色だろう。」

「そう、こんな黒いのもあつたよ。」

洋服のポケットや、前垂れのポケットの中にいれて、チャラ、チャラと鳴らしていましたが、いつのまにか、ヨシさんの姿が見えなくなりました。

「ヨシ子さん、帰つたの。」と、正ちゃんが、きました。

「お家へ糸を取りにいったんだろう。」と、三郎さんが答えました。

あちから、ヨシさんが、かけてきました。見ると、糸と針を持ってきたのです。

「わたし、頸にかけるのだから、正ちゃん、これを糸にとおしてね。」と、いって、小さなヨシさんが頼みました。

ここになかいる中で、正ちゃんがいちばんおお大きかったです。そして、あとのものは、みんなまだがっこう学校へいっていません。だから、正ちゃんまさは、大將たいしょうでした。大將たいしょうが、下したのものに頼たのまれて、できないということは、いえませんでした。

「ああ、とおしてあげる。」と、いつて、正ちゃんまさは、材木ざいもくの上に腰こしをかけながらヨシ子さんこの持つてきた、糸いとと針はりを、自分じぶんの太ふとくて、短い指みじかゆびに受け取りうけとりました。

「なんだ、まだ針はりに糸いとがとおしてないのか、はやく、これをとおしておくれよ。」と、いつて正ちゃんまさは、糸いとと針はりを、ヨシ子さんこに返かえしたのです。

いちばん小ちいさなヨシ子さんこは、もとより針はりのみぞに糸いとをとおすことができませんでした。「じゃ、わたし家うちへいつて、とおしてもらってくるわ。」と、ヨシ子さんこは、またかけ出だしてゆきました。

「三ちゃんさぶ、針はりに糸いとをとおすことができる。」と、正ちゃんまさが、ききました。

「できない、正ちゃんまさは、じゆず玉だまをとおすことができるの。」と、三郎さんさぶろうが、ききました。

「ああ、できるよ、ここんとこを通とおせばいいんだらう。」と、正ちゃんまさは、じゆず玉だまの頭たまをいじっていました。

そこへ、ヨシ子さんが、針に糸をとおしてもらつて、もどつてきました。

不器用な正ちゃんまぎが、これから、いくつも、いくつも、針でじゆず玉だまをとおさなければならぬのです。鼻をぐすぐす鳴らしながら、下を向いて、短い、太い指で、やつと三つ、四つとおしました。

「あ、いたい。」と、正ちゃんは、叫びました。

「指をさしたの。」と、ヨシ子さんがのぞきました。

「もう、あぶないから、およしよ。」と、三郎さんが、いいました。

けれど、正ちゃんは、だまつて下を向いて、じゆず玉を通していました。

「正ちゃん、横ちよを通してはいや、まんなかをとおしてね。」と、ヨシ子さんが、じゆず玉のまんなかを通して、注意しましたけれど正ちゃんは、きわめて不器用でした。

この間に、あちらの往來をチンチン、ガンガンと鳴り物をならして、ちんどん屋がとおりました。三郎さんも、ヨシ子さんも、いつてみたかったのだけれど、正ちゃんが、

いっしょうけんめいで、じゆず玉をとおしているのでゆくことができませんでした。

そのつぎには、カチ、カチと拍子木を鳴らして紙芝居が、原っぱへ屋台をおろしたのです。

たくさん子供たちが、わいわいと集まってきました。ヨシ子さんも、三郎さんも、我慢がしきれなくなつて、とうとう、そつちへかけ出してしまいました。

しかるに、正ちゃんだけは、そんなことも耳にはいらないうちに、じゆず玉をおしていました。

じゆず玉の輪ができ上がると、正ちゃんはよろこんで躍り上がりました。

「できたよ、ヨシ子さん、できたよ！」

じゆず玉の輪を頭の上でふりまわしながら、みんなのいる方へ、自分もかけてゆきましたが、ふと、なにを思ったか、正ちゃんは、かけるのをやめて、立ち止まりました。

「僕、これを、うちへ持つていつて、お母さんや、お姉さんに、見せてやろうかしらん。そして、あとで、ヨシさんにやればいいのだ。」

しかし、正ちゃんには、もう、自分で美しいじゆず玉の輪が造れる自信ができました。「もつと、もつと、きれいなのを造つて、お姉さんにあげるからいい。」と、また、かけ出しました。

* * * *

そこで、私は、正ちゃんのために、いいです。

「正まさちゃんちいは、小ちいさいヨシ子こさんたのに頼たのまれて、とうとう、美うつくしいじゆず玉だまの輪わを造つくつたのです。このつぎのときには、もつと美うつくしくできるにちがいありません。これから、正まさちゃんちいを不器用ぶきようなどといって、笑わらつてはいけませんよ。」

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「左《ひだり》ぎつちよの正《まさ》ちゃん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

左ぎっちょの正ちゃん

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>